

わたしの23年

吉沼 恵梨



1歳半で難聴がわかり、幼児期から聴覚や言語の訓練を受けましたが、幼稚園からずっと健聴の子と同じ環境で育ちました。ちょっとしたトラブルは時々あったものの、それほど大変な思いをせず、子ども時代を過ごすことができました。恵まれた環境だったと思います。

小学校時代は石神井小学校の難聴学級に通い、サポートしていただきました。でも5年生になると、「難聴があるからといって、違う扱いをされたくない」と思うようになり、補聴器や通級していることを隠すようになりました。

中学校時代は、できるだけ自分で努力したいと思い、通級はしませんでした。英語のリスニングは苦労しましたが、家庭で英語教材のCDを何度も聞いて特訓しました。この経験から、「難聴という障害をもつことから、人一倍努力するしかない」と考えるようになりました。人間関係では、障害によって差別してくる人もいましたが、「冷静でドライな対応をすることが、心の安定につながる」と考えていました。

高校時代は、自分の限界を知りたくて、接客業のアルバイトに挑戦…時には、お客さんの注文や社員の指示を聞き逃して失敗することもありましたが、「同じ失敗は二度としない」と決めて、集中して聞き、聞いた内容を確認するようにしました。最終的にはバイトリーダーを任されるようになりました。バイトでの成果に加え、勉強でも努力が実って良い成績を残せたことで、「目標に対して、何事も一生懸命やる」という意識がはっきりしていれば、障害は関係ない」と思えるようになりました。

大学は、広い講堂での講義も増え、授業の聞き取りに苦労しました。その分、教授が書いた本を読んで勉強したりもしましたが、これが語彙や教養を増やすことにもつながり、一石二鳥となりました。時には友達にもサポートしてもらいました。でもやはり、自分で解決することが自信につながると考えていました。「障害をバネに何かを達成することは、障害に対するコンプレックスを解消すること」なのだ。

就職活動は、障害者採用で応募することにしました。当初は一般採用との併用でしたが、障害者採用は人事のサポートが厚く、話をしっかり聞いてもらえたり、会社のことがよくわかったりする良さがありました。現在は、キンビバレッジの販売推進担当をしています。騒がしい環境、歩きながらの商談、マスクしている人との会話、体力仕事からくる疲労など、聞こえにくくなる条件が日常的にいくつもありますが、相手の口をよく見て話す、こちらが率先してハキハキ話す、確認を緻密に行う、立ち止まって話せるような関係を作るなど、自分なりに対処しています。

これからの子どもたちには、相談する勇気をもつこと、小さい頃から確認する習慣をつけること、健聴の人とのコミュニケーションに慣れておくこと、健聴の人にはどう対応してほしいか予め伝えること、自分で努力し、失敗や成功から学んで自信をつけることを、ぜひ伝えたいです。

障害は個性であり、強みです。できないから諦めるのではなく、できるようにするためにどうすればいいか考え、そして行動する…その経験の積み重ねが、障害を個性や強みにしてくれると信じて、頑張ってください。